

美人

赤谷慶子

來年百歳になる母は若かりし頃美女なりき。未だにその片鱗は覗ふを得べし。幼少の頃吾はさる事は絶えて認識せず、我が腦裏にはただただ厳しき躰ばかり残り。箸の持ち方よ、言葉遣ひ、常に叱られし記憶ばかりぞ残れる。母の美人なるを認識せるは一九五八年巴里より歸國し、ミッション系の學校に入學せし頃より。ある父兄參觀日に、親たち入場すると生徒の間に小さきどよめき起きたり。その日、母は巴里より戻りしばかりにてオートクチュールの灰色のスーツに黄色き大輪の花々ある帽子かぶりて現れたり。まづその服装の色合ひは未だ日本にては見らるまじき色と様式なれば、初等科六年生の女子には今めかしく見えたるらん。當時の女性にすれば、母は惚れ惚れするほどの脚線美にて清げなる小顔に八頭身なりき。參觀の終はりし頃生徒の間に「かの麗しき人は何方の母上かしら」といふ話になり、自慢げに「我母なり」と聲をあぐれば、さても「見え透きたる嘘はつかぬこそよろしけれ」と言はれ轉瞬の間に鬱悶きはの際に陥りたりき。それ以降、おのれは母親に覺えずと自覺せり。

さるほど、父泥酔して歸宅し、如何におのれの妻料理上手にて美人かと自慢話を始めき。かくて我に向かひ「汝は母に覺えずかし。父親似なり。ただし、我は男前なり。汝、女に生まれたるが美形に非ず」と斷じき。確かに男前の父親に似たりとも女前とはならず、男子の如き顔ならば美人とは言い難しと納得せる所あり。

その後社會人になりし我は藤田嗣治畫伯の繪好みて、美術館に足運びて觀しものなりき。一九七〇年代兩親ニューヨーク在住の頃、蚤の市にて母藤田畫伯の版畫を格安の値段に見つけき。いまそのリトグラフは我が机前にかかれり。我々巴里在住の頃に、藤田畫伯は様々の晚餐會等に顔いだし、我が父母の出席するあれば一定母いちぢやうに挨拶に來たまひしと母より聞きたり。「和服を著たれば」と母は言ひたれど、他に和裝姿の日本女性も少なから

ず参加せり。吾思ふに、母は藤田畫伯好みならずや。とまれかくまれ、百歳になる母には
遙か彼方の遠き思ひ出ならむ。

(令和三年五月二十八日受附)